

<p>令和6年 11月29日</p>	<h1>病害虫発生予報</h1> <h2>12月号</h2>	<p>茨城県病害虫防除所</p>
------------------------	--------------------------------	------------------


**今年の防除日誌を整理・確認して作業内容を振り返り、
来年のよりよい防除につなげましょう！**

< 目 次 >

<h3>I. 今月の予報</h3>	
<p>【注意すべき病害虫】</p>	
<p>イチゴ：アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類・・・・・・・・・・・・・・・・ 1</p>	<p>促成ピーマン：アザミウマ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2</p>
<p>【その他の病害虫】</p>	
<p>イチゴ、促成ピーマン、共通害虫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3</p>	
<p>【防除所レポート】</p>	
<p>トマトキバガのフェロモントラップへの誘殺状況について・・・・・・・・ 3</p>	
<p>令和6年産大豆子実の主要病害虫による被害状況について・・・・・・・・ 4</p>	
<p>II. 今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5</p>	

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
 「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>) で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200
 ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報がご覧いただけます。
<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>



※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、寄生花率（本年値 0.8%、過去8年平均値 0.1%）、発生地点率（本年値 40%、過去8年平均値 4%）ともに平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速いので、花をよく観察し、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 青色粘着トラップを 10a あたり 100～400 枚設置すると密度低減に有効である。
- ③ 薬剤散布は、アザミウマ類の寄生部位である花にかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

2. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、寄生葉率（本年値 20.7%、平年値 8.3%）は平年より高く、発生地点率（本年値 70%、平年値 59%）は平年並～やや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

(イチゴ 続き)

3. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、寄生葉率（本年値 3.4%、平年値 1.8%）、発生地点率（本年値 40%、平年値 24%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アブラムシ類は増殖が速く、多発すると葉や果実にすす症状を生じるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、寄生花率（本年値 69.0%、平年値 39.4%）は平年より高く、一花あたりの寄生虫数（本年値 4.0頭、平年値 2.1頭）は平年よりやや多い～多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルス病を媒介するので発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 青色粘着トラップを 10a あたり 100～400 枚設置すると密度低減に有効である。
- ③ 薬剤散布は、薬液が花や果実にもかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を導入している場合は、影響が小さい薬剤を選択する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並	11月下旬現在、平年並の発生である。
ピーマン 促成	うどんこ病	発生量：やや少ない	11月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
共通害虫	シロイチモジヨトウ	発生量：多い	11月下旬現在、直近1か月間のフェロモントラップへの誘殺数は、つくば市で平年より多い。イチゴ、冬レタス圃場で発生を認めている。
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多い	11月下旬現在、直近1か月間のフェロモントラップへの誘殺数は、筑西市で平年より多く、土浦市および龍ケ崎市で平年よりやや多い～多く、銚田市で平年並である。イチゴ、秋冬ハクサイ、冬レタス圃場で発生を認めている。
	オオタバコガ	発生量：平年並 ～やや多い	11月下旬現在、直近1か月間のフェロモントラップへの誘殺数は、龍ケ崎市で平年よりやや多い～多く、土浦市および坂東市で平年よりやや多く、筑西市で平年並である。

防除所レポート [トマトキバガのフェロモントラップへの誘殺状況について]

トマトキバガは、県内では、令和5年に初めて発生が確認された侵入害虫で、主な寄主植物であるナス科（トマト等）を食害します。（令和5年10月24日発表 病害虫発生予察特殊報 第1号 参照）

現在のところ、県内でのトマトキバガによる農作物の被害は認められていませんが、フェロモントラップへの誘殺数は昨年より多い状況です（図）。他県では、冬期間でもハウス内での発生が確認されていますので、今後もハウス内への飛び込みや発生に注意しましょう。被害の特徴等については、令和6年10月18日発表の病害虫速報 No.9を参考にしてください。

トマトキバガの発生や被害が疑われた場合は、最寄りの農業改良普及センター、病害虫防除所に連絡してください。

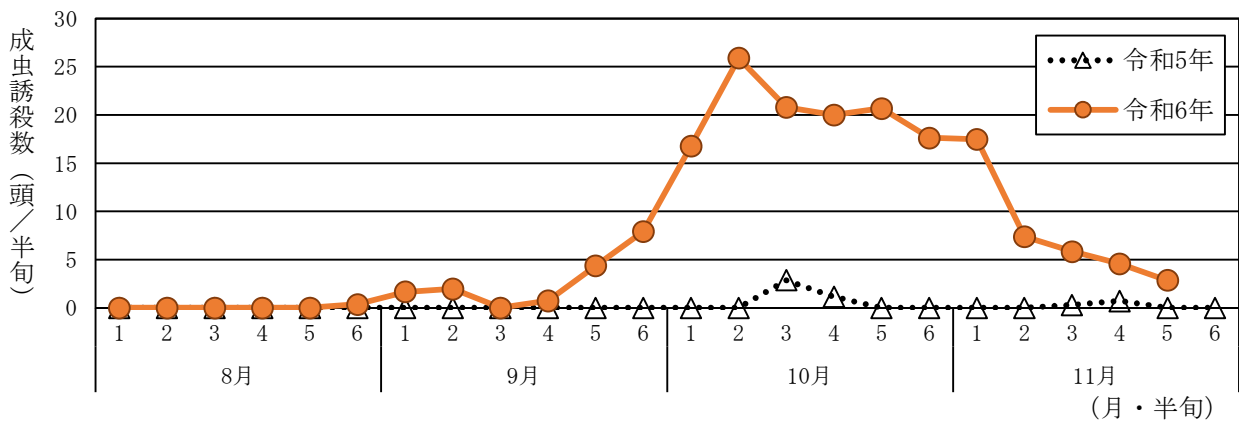


図 フェロモントラップへのトマトキバガ成虫の誘殺数（県内4地点合計）

令和6年産大豆子実の主要病害虫による被害状況について

令和6年産大豆子実の主要病害虫による被害状況と防除対策をまとめました。次作に向けた対応の参考にしてください。

【被害状況】

病害では、紫斑病、ウイルス病の被害粒率は平年並、べと病の被害粒率は平年より高くなりました。虫害では、吸実性カメムシ類、マメシクイガによる被害粒率は平年よりやや高く、フタスジヒメハムシによる被害粒率は平年より高くなりました。

表 令和6年産大豆子実の主要病害虫による被害状況

病害虫	被害粒率 (%)			発生地点率 (%)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
紫斑病	0.6	1.5	5	77	59	4-5
べと病	6.1	2.7	1	92	63	1
ウイルス病	1.3	0.9	4	46	34	4
吸実性カメムシ類	4.2	2.7	3	92	80	3-6
マメシクイガ	2.5	2.2	3	54	52	5-6
フタスジヒメハムシ	1.3	0.4	1	77	50	1-2

1)過去10年間(平成26～令和5年)の値の平均値。ただし、べと病は平成29年を除外した過去10年間(平成25～令和5年)の値の平均値。

2)本年を含む過去11年間における本年値の順位。ただし、べと病は平成29年を除外した本年を含む過去11年間(本年および平成25～令和5年)における本年値の順位。(4-5は4位から5位まで同じ数字であることを示す)

【調査圃場】 県内13地点の大豆圃場(里のほほえみ9圃場、納豆小粒4圃場)

【調査方法】 1圃場あたり10株の上位20莢程度(合計200莢程度)を採取し、子実の被害を目視で調査した。

【採取時期】 令和6年10月第4、5半旬、11月第1半旬

【防除対策】

<紫斑病>

- ① 茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 防除適期は開花期の20日後頃である。
- ④ 開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花期の30日後に追加防除を行う。2回目の防除を行う際は、1回目の薬剤とFRACコードの異なる薬剤を散布する。
- ⑤ 収穫が遅れると発生が多くなるので、適期に収穫する。

<べと病>

- ① 茎葉を含む被害残渣は適切に処分し、被害が多発した圃場では連作を避ける。
- ② 種子更新を行う。
- ③ 密植を避け、風通しを良くする。
- ④ 防除適期は開花期～子実肥大期である。

<ウイルス病>

- ① 種子更新を行う。
- ② 生育初期にウイルス病に感染すると被害が大きくなることから、媒介虫であるアブラムシ類を早期に防除する。
- ③ 発病株は早い時期に抜き取り、処分する。

<吸実性カメムシ類>

- ① 薬剤防除は莢伸長期以降、発生に応じて7～10日ごとに複数回行う。
- ② 幼虫も子実を加害しながら成長するため、幼虫の発生状況にも注意する。

<マメシクイガ>

- ① 成虫の移動性が低く発生圃場で繁殖・越冬するので、連作を避ける。
- ② 防除適期は産卵最盛期～その約10日後であり、大豆の生育ステージとしては、莢伸長終期～子実肥大初期頃にあたる。

<フタスジヒメハムシ>

- ① 収穫後に枯葉の処理と耕起を行い、翌年の発生を抑える。
- ② 薬剤防除は子実肥大期にカメムシ類と同時防除を行う。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 11 月 30 日から 12 月 29 日)

気象庁 (11 月 28 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
	気温	関東甲信全域	40	30	30
	降水量	関東甲信全域	40	40	20
	日照時間	関東甲信全域	20	40	40

[概要]

期間の前半は、気温の変動が大きいです。

平年に比べ晴れの日が多いです。

< 1 週目の予報 > 11 月 30 日 (土曜日) から 12 月 6 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 50%

< 2 週目の予報 > 12 月 7 日 (土曜日) から 12 月 13 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率ともに 40%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 12 月 14 日 (土曜日) から 12 月 27 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散 (ドリフト) しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類 (FRAC コード、IRAC コード) の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。